真田山陸軍墓地

朝日新聞 9 月 25 日夕刊に「陸軍墓地眠れぬ悲しみ」という記事が大きく掲載された。台風 21 号の影響で倒れた真田山陸軍墓地の樹木の写真も。図書館の帰りに、地下鉄で「玉造駅」まで行き、ぼちぼちではなく、真っすぐ墓地に向かった。

台風の関係で「立入禁止」の看板もあり、墓地入口近くをすこし歩いた。整然と並ぶ墓碑を写真に撮った。陸軍墓地が案内されていたので、抜粋して紹介する。

本墓地は、1869 年(明治 2 年)から 1870 年にかけて我国陸軍の中枢機関が次々と大阪に創設されたことに伴って、1871 年(明治 4 年)に日本で最初に設置された陸軍墓地で、現在の面積は約 15.090 平方メートルあります。このような陸軍墓地は戦前、全国で 80 箇所以上つくられましたが、それらの中で最も大きな規模を持つ真田山陸軍墓地は終戦当時の景観をよく残していると言われています。終戦に伴い 1945 年(昭和 20 年)12 月陸軍省が廃止され、大蔵省の所管する国有財産となりましたが、1946 年(昭和 21 年)8 月に大蔵省との国有財産無償貸付契約により、貸付を受けた大阪市が管理をし今日に至っています。墓地内には、1873 年(明治 6 年)の徴兵令施行以前に属する兵士の墓碑にはじまり、西南戦争や日清戦争、日露戦争、第 1 次世界大戦を経て、先の大戦終結時に設置された墓碑を含め、約 5100 基の個人墓碑、日露戦争・満州事変戦病没将兵合葬碑並びにアジア太平洋戦争の戦病没将兵約 8200 人の遺骨等を納めた納骨堂があります。また、軍役夫や日本軍の捕虜となった清国兵、ドイツ兵の墓碑、及び兵役従事中の平時病死者の墓碑もあることがこの墓地の特徴となっています。

真田山陸軍墓地を駆け足で訪ね、墓碑の行列を眺めていると、凄惨な体験をして死んでいった日本軍兵士に思いを馳せた。そして「陸軍兵士」として、新婚ほやほやで戦地に向かった父のことも思い浮かべた。

墓地の帰りに梅田の書店に立ち寄り、写真の話題の書『日本軍兵士』を手に入れた。表紙カバー裏から―310 万人に及ぶ日本人犠牲者を出した先の大戦。実はその 9 割が 1944 年以降と推算される。本書は「兵士の目線・立ち位置」から、特に敗色濃厚になった時期以降のアジア・太平洋戦争の実態を追う。異常に高い餓死率、30 万人を超えた海没死、戦場での自殺と「処置」、特攻、体力が劣悪化した補充兵、靴に鮫皮まで使用した物資欠乏‥‥。勇猛と語られる日本兵たちが、特異な軍事思想の下、凄惨な体験を強いられた現実を描く。

(2019 年 10 月 7 日)